

社告

入選二編

ある体験

雪

Kの話から

橋本哲彦

(京都大文学部)

田中光二

(新潟大工学部)

賞金各一万円

本紙は一昨年千号記念懸賞小説募集以来、第三回の小説募集を致しましたが、三月末の締切日までに全国大学から六十七編の応募がありました。選者には第一回と同じ伊藤整、野間宏の両氏をお願いし、選考の結果、今年度は上記二つの作品がすぐれており、互いに優劣つけ難いということで、とくに入選二編といたしました。なお橋本君の「ある体験 Kの話から」は今号に、田中君の「雪」は次号(6月4日発行)に掲載いたします。

京都大学新聞社

作品選考過程

伊藤 野間

「敗北」「にりり水」「おえつ」はまず小説として無理だ。

野間 「暗い祭」のテーマは面白いが、それにせまる文章力がないのりこんでしまっている。

伊藤 熱中型の文章だが、もう少し読者に届くように書いてく

れたらよかった。読みよければ心理学的文献みたいな感じがする。

「退職金」「虫」といつ、古風な小説二編がかなりうまく書けていて面白かったが、前者は終わりが始めにだしたモチーフと結びついていけばよかった。押し方が間違っていたと思う。後者は、恋人がよく描け

ていない。野間 「狂人」もどつ発展するのかと期待していたら、題のとつりに「狂人」だった。といつことがかかりした。フデのたつ人だと思つてもつと異なつた展開が遂げられるべきだった。

伊藤 大学生には、二十歳前後の人に適した書き方があるはずだが、一般的に若い年齢で書く、無理をするもので、自分が現在あることを正直に見つけて、率直に書くことはむづかしい。それができるといつのは才能がある人だと思つ。その点で「雪」を買

う。「ある体験」は架空の話だけれども、「ついつつ」は現実によくぶつかることで、「不安定なもの」をかなりよく書けている。

野間 「雪」はわり好きだった。初めのつちは言葉つかいの点で「タゴタ」しているが、女性との幻想の中をかきわけながら進んでいくにつれリアリズムになり、女性のところを省く。できれば、始めの幻想味に戻って終わってもらいたかった。もつと磨きだせば、新しいものができると思う。

「ある体験」は自分の位置を明確にしえない不安定というものがよく書けている。ある瞬間に、自分が周囲のものから断ち切られてしまつ。そこに「現代」といつものをもつ一度見直してみよつといつ文学としての新しさがある。

伊藤 「雪」は非常にフライベイトな感じだし、「ある体験」は抽象的で比較するのは困難で、どちらが優れているとはいえない。どつこと、どつこと、「雪」「ある体験」の二編をいつれも入選とすることにまよる。

野間 できるだけ多くの作品を読んでもらいたい。それと無意識的に対抗する形で創作されるわけだから、つづけて応募してもらいたい。

伊藤 どの人も一人で書いているよつで、それはへんに流行に左右されたりせず自由でよいのだが、同人雑誌のよつな形で仲間とテーマを練り合つことも必要だ。

野間 できるだけ多くの作品を読んでもらいたい。それと無意識的に対抗する形で創作されるわけだから、つづけて応募してもらいたい。

伊藤 どの人も一人で書いているよつで、それはへんに流行に左右されたりせず自由でよいのだが、同人雑誌のよつな形で仲間とテーマを練り合つことも必要だ。

野間 「雪」は非常にフライベイトな感じだし、「ある体験」は抽象的で比較するのは困難で、どちらが優れているとはいえない。どつこと、どつこと、「雪」「ある体験」の二編をいつれも入選とすることにまよる。

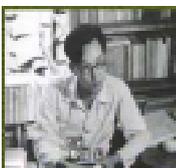
伊藤 「雪」は非常にフライベイトな感じだし、「ある体験」は抽象的で比較するのは困難で、どちらが優れているとはいえない。どつこと、どつこと、「雪」「ある体験」の二編をいつれも入選とすることにまよる。

野間 「雪」は非常にフライベイトな感じだし、「ある体験」は抽象的で比較するのは困難で、どちらが優れているとはいえない。どつこと、どつこと、「雪」「ある体験」の二編をいつれも入選とすることにまよる。

伊藤 「雪」は非常にフライベイトな感じだし、「ある体験」は抽象的で比較するのは困難で、どちらが優れているとはいえない。どつこと、どつこと、「雪」「ある体験」の二編をいつれも入選とすることにまよる。



伊藤整氏



野間宏氏

選後評

全体的な印象

野間 今回で三度目だが、

表現力からいへば最初がいちばん優れていた。曾我君の「ある微笑」の印象が強く残っている。昨年度はダメだったが、今

回はテーマが複雑になり、鋭さが出てきた。真似ごとでなしに自分の眼でみて、テーマにしよつと意識が沈殿してきているが、まだ類型的なところも入っている。

不安定をよく描く ある体験

伊藤 大学生には、二十歳前後の人に適した書き方があるはずだが、一般的に若い年齢で書く、無理をするもので、自分が現在あることを正直に見つけて、率直に書くことはむづかしい。それができるといつのは才能がある人だと思つ。その点で「雪」を買

う。「ある体験」は架空の話だけれども、「ついつつ」は現実によくぶつかることで、「不安定なもの」をかなりよく書けている。

野間 「雪」はわり好きだった。初めのつちは言葉つかいの点で「タゴタ」しているが、女性との幻想の中をかきわけながら進んでいくにつれリアリズムになり、女性のところを省く。できれば、始めの幻想味に戻って終わってもらいたかった。もつと磨きだせば、新しいものができると思う。

「ある体験」は自分の位置を明確にしえない不安定というものがよく書けている。ある瞬間に、自分が周囲のものから断ち切られてしまつ。そこに「現代」といつものをもつ一度見直してみよつといつ文学としての新しさがある。

野間 今回で三度目だが、表現力からいへば最初がいちばん優れていた。曾我君の「ある微笑」の印象が強く残っている。昨年度はダメだったが、今回はテーマが複雑になり、鋭さが出てきた。真似ごとでなしに自分の眼でみて、テーマにしよつと意識が沈殿してきているが、まだ類型的なところも入っている。

野間 「狂人」もどつ発展するのかと期待していたら、題のとつりに「狂人」だった。といつことがかかりした。フデのたつ人だと思つてもつと異なつた展開が遂げられるべきだった。

伊藤 大学生には、二十歳前後の人に適した書き方があるはずだが、一般的に若い年齢で書く、無理をするもので、自分が現在あることを正直に見つけて、率直に書くことはむづかしい。それができるといつのは才能がある人だと思つ。その点で「雪」を買

う。「ある体験」は架空の話だけれども、「ついつつ」は現実によくぶつかることで、「不安定なもの」をかなりよく書けている。

野間 「雪」はわり好きだった。初めのつちは言葉つかいの点で「タゴタ」しているが、女性との幻想の中をかきわけながら進んでいくにつれリアリズムになり、女性のところを省く。できれば、始めの幻想味に戻って終わってもらいたかった。もつと磨きだせば、新しいものができると思う。

「ある体験」は自分の位置を明確にしえない不安定というものがよく書けている。ある瞬間に、自分が周囲のものから断ち切られてしまつ。そこに「現代」といつものをもつ一度見直してみよつといつ文学としての新しさがある。

伊藤 「雪」は非常にフライベイトな感じだし、「ある体験」は抽象的で比較するのは困難で、どちらが優れているとはいえない。どつこと、どつこと、「雪」「ある体験」の二編をいつれも入選とすることにまよる。